

LL 授業教材の利用開発研究

II 教育用ビデオ教材とキャプション付き 映画教材による授業研究

森 豪・磯部哲也・坂本季詩雄・宮本節子

A Study of the Use and the Exploitation of LL Educational Materials

II A Report of the Class for an Educational Videotape and a Closed-Captioned Movie Videotape

Tsuyoshi MORI, Tetsuya ISOBE,
Kishio SAKAMOTO and Setsuko MIYAMOTO

There is a remarkable trend of using videotapes as a teaching material for learners of the second language in a class. You can survey that the priority of using a videotape over the other audio teaching materials has been highly estimated recently in some papers in Japan and throughout the world, which show, for example, that learners' high interest in video materials, easier understanding of a context by visual presentation as nonverbal information, and more frequent access to natural daily way of living as its advantages, and its normal speed speech and difficulty of understanding its contents for learners of the second language and its less effectiveness on learning a foreign language because the learners see it only as amusement.

Recognizing not only the advantages but also the disadvantages of using a videotape as a teaching material, we present some results we have had in classes during the year and the points we have noticed in using a videotape.

I

近年ビデオを教材として取り入れようとする傾向はますます高まりつつあり、その価値も次第に認識されるようになってきている。ビデオ教材のオーディオ教材に対する優位性は数々の論文で議論されているが(河野1980, Markson-Brown1985, 月山1988)¹⁾、その中で述べられているビデオ教材の長所、短所を要約すれば、次のようになる。

「長所」

1. 受け手である学生の関心が高い。
2. 映像の提示により、非言語情報が与えられ、文脈理解が容易になる。

3. 実際のコミュニケーションに於いて、メッセージは言語情報のみならず、非言語情報によっても伝えられるが、映像が伴わない教材の場合は、非言語情報のかなりの部分が言語情報に置き換えられる。音声のみによって提示される言語情報は、“too explicit”にならざるをえず、言い尽くされ過ぎてしまうため不自然なものになってしまう。その点、ビデオ教材は、映像による助けを得られるので、地のままの“authentic”な、自然で本物らしい言語情報を与えられる。

「短所」

1. 本来母国語話者の視聴者を対象として作られているので、第二言語学習者には、話す速度が速す

ぎ、また内容も難し過ぎる事がある。

2. ただ単に、興味本位に見ることになってしまい、外国語学習としての効果は少ない。

ビデオ教材にも多種類の教材がある。それを大きく二分すれば、教育用と非教育用に分けられる。語学学習を意図したものとそうでないものである。上記の短所を克服しようとしたのが教育用であり、上記の長所、欠点がそのままあて嵌るのが映画である。本稿では、それらの代表として以下 *Switch On* (NCI 刊) とキャプション付き映画『卒業』を使用した授業について報告する。

II

まず *Switch On* について述べる。「言語学習の目標は、目標言語による他の人とのコミュニケーション能力を獲得することにある」²⁾とする J. Lonergan は、テレビ視聴者は受動的に視聴するだけで満足しているが、「言語学習の面では、ビデオとの相互対話という特別な行為が必要である」³⁾と言い、*Switch On* をその好例として挙げている。確かに *Switch On* は「相互対話」が目立った特色であり、*Switch On* のもう一つの際立った特色であるミステリー仕立てのストーリー（これがこの教材使用の第一の動機であるが）の中に学習者が参加して「相互対話」をするような形になっている。学習者もストーリーの登場人物の一人であり、ストーリーの展開する途中で絶えず他の登場人物に話しかけられ、その度に○印が現れて応答を促す。学習者が応答できる時間を経て、求められている言葉がモデルとして文字と音声で示される。そして各場面のダイアログの後の Exercise での Teacher と学習者のあいだの表現練習もまた「相互対話」である。

しかしそのような画面の人物が学習者に向かって直接話しかけ、応答を求める「相互対話」が *Switch On* のすべてではない。*Switch On* にはテキストがあり、それは全体で10章からなるが、それぞれに準備問題、内容理解問題、技能練習問題が設けられている。それらは、特に「対話」形式を意図していない。だからと言って、それらが「対話」形式ではないということにはならない。それらは、学習者の「能動的行為」を誘発する意図を持っており、その意味で「対話」を狙ったものなのである。ビデオをただ受動的に視聴するのではない。

Switch On の問題がどのようなものであるのか、第一課を例にとって見てみよう。第一課の目標は、自分がだれであるのかを明かにする表現を学ぶことであり、文法的には be 動詞＋補語と人称代名詞である。最初の問題が準備問題である。その 1 にはホテルのフロントの絵があり、描かれたフロント係りや客や鍵などの名称を答えることを求める。答えは選択肢の中から選ぶ。2 は、ホテルに関する容易な短文が左右に並び内容の通じる物を選ぶのである。3, 4, 5 は、ホテルの宿泊カードのようなものへの書き込み問題である。名前、住所、年齢、国籍などを書き込むもので、練習として、ある人物の身元を示したものとその人物のカードと比較して誤りを指摘するもの、ある人物の身元をカードに書き込む事を求めるもの、そして自分の身元を書き込むものが用意されている。これらの問題は、この後に見るエピソードに関連している。エピソードは、ホテルのフロントの場面である。

次に内容理解問題がある。エピソード 1 を見ることを求めた後に内容についての設問がある。設問には、エピソード中の場面が六枚の停止写真で示され、それぞれに設問があり、答えを選択肢から選ぶ。ついでエピソードをもう一度見ることを求める。今度は、エピソード中の一人物として声を出して応答することが求められる。エピソードは、ビデオ・トランスクリプトとして示されている。エピソードは、ホテルのフロント場面で、フロント係りとマリリンという女性との応対から始まる。そしてボジャーという男が来て受け付けを済ます。そこへヴラムスキーという謎の男が来る。フロント係りが挨拶すると、ヴラムスキーは、画面に向かって助けを求める。つまりこの場面では、学習者も登場人物となることが求められているのである。学習者がヴラムスキーに代わってフロント係りに答える。次いでフロント係りと学習者の応対になる。この応対には、応用性がある。エピソードの後、画面からの学習者への働きかけが続き、Teacher があなたはだれですかと話しかけ、学習者が自分がだれなのか答えることを求める。答え方のモデルが、ビデオ、トランスクリプトで与えられている。

次に練習問題がある。この問題の特色は、ヒアリング・テストにある。付属のカセット・テープにはビデオのエピソード場面についての解説があり、テキストにはそのトランスクリプトがところどころ抜

いた形で示されている。テープを聞いて穴を埋める。場面解説に続いて、登場人物の名前を書くことを求め、エピソードに出た部屋番号に倣って、番号のヒアリング・テストがあり、更に描かれた鍵の絵に対し、テープの言う鍵がどれか答えることを求める。次に一般的な形のホテル・フロントでの会話が用意され、学習者がフロント係りに応答することが求められる。

以上のような設問が10課に渡って続けられるが、*Switch On* の特色は、学習者のビデオに対する能動的、積極的な対応を求めた以上のような設問ばかりでなく、*Switch On* の副題が *The Mystery of Valley Forge* であることが示しているように、全体がミステリー仕立てで、通常よく見られる変化の乏しい日常表現練習の場面の羅列と違って、興味をもってエピソードを追うことができるということである。ミステリーを追いながら、同時に實際生活に応用できそうな表現を学んでいこうという意図は、そのミステリーの出来具合によってその成果が左右されるが、おもしろい狙いであると評価してよいと思われる。

Switch On のミステリーの舞台は、アメリカ独立戦争に関わる歴史的な町 Valley Forge に置かれている。そこのホテルに宿泊した学習者を含めた四人を中心に展開する。四人の中でも、ミステリーなのはヴラムスキーという英語が殆どできない男で、この男に皆が振り回されるのである。ヴラムスキーがあやしげだと言うのは、この町で開催される歴史会議に出席するつもりボジャーという男で、ヴラムスキーがスパイだと同じく会議に出る予定の女性マリリンに話し、更に学習者も巻き込んで探偵騒ぎが始まる。結局ヴラムスキーは、以前よりジョージ・ワシントン熱愛者の歌手でワシントンゆかりのこの町に仕事のついでに立ち寄ったのであった。すべてが終れば肩すかしをくった気持になるのは、ミステリーの常で、そのあっけなき、馬鹿ばかさを非難するのは、お門違いである。しかし先に結論を知ってしまった場合、学習者への動機付けという面で、非常なマイナスとなる可能性がある。

III

ビデオ *Switch On* を授業主体にし、*Switch On* 付属のテキストに従って進めた授業の報告をする。始めの頃は、各課ごとに設定されている習得目標(表

現と文法)を学生に強く意識させようと説明に時間を割いたが、そういうことにこだわってやたら説明を多くするよりはテキストの問題を次々と手早くこなしていった方が、学生の興味や集中力を保つには良かった。準備問題のレベルは、本学の学生の大部分にとっては難し過ぎることもなく、適当に思われた。

ビデオのエピソードを見て答える内容理解問題では、理解度がかかなり高いように思われた。本来この設問は、ビデオを視聴して答えるべきもので、次ページに用意されたスクリプトを読まずに答えなければならぬ。スクリプトを読めば解答は容易になる。理解度が高かったのは、学生が事前に十分スクリプトを読んできたせいかも知れない。否、読んで来なければいけないのである。予習はしてこななければいけない。そのように考えてみると、このテキストの欠点ということに思い至る。スクリプトがあり、また学習者に対話を求めながら、モデルとして考え方が書いてあるために、学習者はビデオを見る前に、まず文字理解から入ってしまい、このテキストの意図を損なう可能性があるのである。

練習問題のヒアリング問題は、音声テープによるものである。情報量が減ると理解度は落ちてくるが、一度に聞き取る量が一単語か二単語くらいである場合、4、5回聞かせるとかなりの学生が正答できる。4～6単語からできている文章では、前置詞や冠詞などがリエゾンした場合や三単現のsなどが聞き取りにくいようである。多種の情報、即ち文法、前後の脈絡、リエゾンによる音の変化、画像がある場合はそれから得られる情報などを元にして聞き取る習慣を身につけるよう指導すべきである。そして学生の聞き取り能力の進歩の程度を、具体的に数字によって示すことも、学習意欲を高める上で重要である。進歩の程度を数値化することは、指導法を再検討するためにも有効である。しかしその数値化は、例えばいかなるテストをするのか一つを取っても、試行錯誤をしいられることを覚悟せねばならない。

Switch On の授業終了に伴い、アンケート調査を行った。以下がその結果である。総数41名、()内は総数に占める割合である。

1. 準備問題は、どの程度理解できたか。
 完全に理解できた 4 (9.8) 殆ど理解できた 25 (61) まあまあ理解できた 11 (26.8) 殆

- ど理解できない 0 (0) 全く理解できない
0 (0)
2. 練習問題の聞き取り問題は、どの程度理解できたか。
完全に理解できた 0 (0) 殆ど理解できた
12 (29.3) まあまあ理解できた 25 (61) 殆ど理解できない 3 (7.3) 全く理解できない
0 (0)
3. 物語のストーリーは、ビデオを見ることでどの程度理解できたか。
完全に理解できた 0 (0) 殆ど理解できた
12 (29.3) まあまあ理解できた 29 (70.7)
殆ど理解できない 1 (2.4) 全く理解できない
0 (0)
4. 英語を聞き取る時に注意した点はなにか。
音声のみ 3 (7.3) 音声と文法 14 (34.2)
音声と文法と前後の意味18 (44) 音声と文法
と意味と画像 7 (17)

以上の結果、理解できなかった者は、殆どいなかったと言える。その一方で、完全に理解できたと自信をもって答えられる者も殆どいないと言える。全く程度が高く、付いていけずに途中放棄することも無い。また完全なる理解を求めて学習することが、可能な教材である。こういった点で本学の学生には適当な教材であったと思える。しかしながら、一年間を通じてこの教材のみを使ったクラスに、「飽き」というものが生じている学生が見受けられた。「こういう教育的なものはつまらない」という学生もいた。ミステリー仕立てがあるから、普通の教育用ビデオにはないおもしろさがあるものと期待したが、実際は、やはり教育用は教育用の枠を出ないと感じる学生もいたのである。先に触れた、ビデオを見る前にスクリプトを読むことができ、理解力が高くなるものの、ビデオの新鮮度を失った可能性もある。テキストを買わずに、毎時間コピーしてやらせるのも一案である。また、*Switch On* のテキストの一部をコピーしたものを配布してやらせ、他の教材と併用するのも一案である。

IV

本稿の最初に挙げたビデオの長所と短所を、今一度振り返ってみたい。長所は、学生の関心が高いこと、非言語情報により理解が促進されること、自然

な言語情報が得られることであった。短所は、難解であり、興味本位に見て語学学習にならない事である。*Switch On* は、語学学習を目標としており、それらの短所を克服しており、長所も満たしているようだが、欠けるのは長所の第一にあげられている関心度である。ミステリー仕立てであっても、膨大な数の大衆を魅了することを目指した一般の映画とは比較にならない。一般映画への関心の高さは、日本語字幕付き映画『ローマの休日』を使用したクラスでの次のようなアンケートに示されている。このクラスでは、授業の最初に映画全編を通して見たあと、毎回の授業で5分ほどの所要時間のスクリプトに、1単語づつ計10単語の空白を作り、映画ビデオを見て、穴埋めさせた。総数44名()内は%

1. 授業はおもしろかったか。
とてもおもしろかった 13 (29.5) おもしろ
かった 30 (68.2) あまりおもしろくなかった
1 (2.3) 全くおもしろくなかった 0 (0)
2. 『ローマの休日』についての感想。
とてもおもしろかった 28 (66.7) おもしろ
かった 12 (28.6) あまりおもしろくなかった
1 (2.4) 全くおもしろくなかった 1
(2.4)
3. ビデオを使った授業について(一人何回でも挙
手可)。
いくつも映画だけを見たい 33 (75) 映画を
使って聞き取りの練習をしたい 8 (18.2) 映
画と原作を読み比べてみたい 13 (29.5) 英
語の字幕の付いた映画で目と耳で内容を理解す
る練習をしたい 19 (43.2)

映画のビデオを使うことにより、授業が興味あるものになったと言える。それも、なによりも、「いくつも映画だけを見たい」と75%の学生が答えているように、まず映画自体への強い興味があるからなのである。この『ローマの休日』クラスでは、シナリオのスクリプトの一部を抜いて、穴埋め問題を作り、ビデオを見て解答させた。そのクラスの能力の伸びについて客観的に調べるため、特に聴力についての客観的能力テストを、全くオーディオ教材を使わないクラスA、聴覚用テープ使用クラスB、『ローマの休日』クラスCに於いて、授業開始時の4月と9月に同じテストで調べた。その結果は以下のようであ

る。

満点10	第一回	第二回
クラスA	4.0	4.1
クラスB	3.6	4.3
クラスC	3.6	4.3

(テスト内容については、本稿最後の表を参照)

この結果、伸びは『ローマの休日』クラスが最も良かった。そこには多少なりと映像の助力(映像の非言語的助力と日本語字幕の言語的助力)があるものと思われるが、更に検討してみなければならない。

V

ここで、先のアンケート調査に関して考えておきたいことがある。それは、かなりの学生が多くの映画を見たがっていることである。この要望にはいかに答えるべきであろうか。英語の授業という制約の中で、多くの映画を見たいという学生の希望はかなえることのできるものであろうか、また、多くの映画を見ることは英語学習の向上につながるのだろうか。

いろいろな作品のおもしろい場面を次々見せるのがよいのか、あるいは一つの作品の各シーンを一年かけてじっくり見せるのがよいのかは、カリキュラム立案者の頭を最初に悩ませる問題である。

Someya (1989) は前者の案を支持して、次のように述べている。

Showing all the details of a movie in class will no doubt provide satisfaction to students, but that will not be able to develop their English ability efficiently.⁴⁾

しかしながら、後者の案—1 movie/1 school year—にも次のような利点があると考えられる。

1. 時間が十分とれるので、作品の背景などについて解説を与えることができ、作品を深く鑑賞できる。
2. 視聴時間の経過につれて、次の場面についての予測力が増し、登場人物の発話内容の予測が可能になる。
3. 登場人物の話し癖—発音、音調、使用語彙等の傾向が分かる。子供の話し方、大人の話し方、formal/informalの差、slang等を教えられるのではなく、学習者自身が気づくようになる。

一方、一年の間に様々な映画の「部分」を見せるとなると、学生にとって刺激的ではあるものの、文脈情報の不足から場面に対する予測力が低下し理解が困難となろう。従って、Someya (1989) の勧めるように、粗筋のかかれたものを予め学生に渡しておくことが必要である。しかし、たとえそのような努力をしたとしても、(筋の予測はできるにせよ)、登場人物の発話及び使用語彙を具体的に予測させることは難しいと思われる。また、映画を教材として使う場合、様々な言語 variation を提示できることが利点ではあるが、多すぎる言語 variation の提示は、学習者の発話理解を妨げる恐れがある。

以上のような理由から“1 movie/1 school year”という立場に立って映画を用いた実験授業を行ったが、その一つである映画『目撃者』を使用した授業について触れておきたい。

- 映画『目撃者』は、いくつかの候補の中から、比較的分かり易い英語でしかも最後まで見るものを引きつけるおもしろさのある映画ということで、選ばれた。この映画は、アーミシュの一人の少年がふとしたことから麻薬取引に関係する殺人を目撃し、事件に巻き込まれる所から物語が始まる。ストーリーは、麻薬取引に手を貸す悪徳警察官から少年とその母親を守り、警察権力の及ばないアーミシュの村に逃れる刑事を追ってスピーディに展開する。カメラは、現代文明を拒否して厳格な宗教規律のもとに生きるアーミシュの人々の平和な村の様子を美しく映し出す。逃走する途中負った傷をいやす刑事ブックと少年の母親の淡いロマンを、そのアーミシュの村を舞台に描く中盤の後、追っ手の悪徳警察官が村に現れストーリーはまたもや急展開を見せる。暴力で制しようとする悪徳警察官が非暴力の村人の前に武器を手放すシーンを最後に映画は終結に向かう。この映画の魅力はいろいろあるが、教材として見る場合に挙げられる魅力は次の三点であろう。第一に、ストーリーの展開がスピーディであり、飽きさせないこと。第二に、現代的問題をテーマにした比較的新しい映画であること。第三に、アメリカ開拓期の生活様式を厳格に守るアーミシュの社会を見せてくれるユニークな映画であること。しかしながら、学生がこれらの魅力を魅力として捉えるかどうか懸念される所であった。

一年間一つの映画を教材として使い続ける場合の最大の問題は、学習者の興味の低下であろう。幸い

にも、『目撃者』のクラスでは継続視聴に対して不満の声が上がらなかった。購読の授業なら途中で放棄する学生でも懸命に会話を聞き取ろうとしていた。なぜなら、作品がおもしろいと感じられたからである。一年間の視聴後に学生に書かせた感想の中には、「映画がよかった」と言う意見がかなり多くみられた。この「よかった」と言う意見の理由として、脚本の良さ、カメラワークの良さ、音楽の良さ、配役の良さ等が挙げられ、一通りの視聴からは得られなかったであろう作品に対する深い鑑賞がうかがわれた。これも繰り返し映画を見るところから得られたものではないだろうか。一回見てしまえば興味を失い熱意を持ってみなくなるのではないかと懸念されたが、作品に魅力がある場合は繰り返しの視聴により更に見方が深くなったように思われる。英語に関しても、「最初のうちは速すぎて分からなかったが、繰り返し見ているうちに少しずつ分かるようになった。」とか「英語だけの会話なのにだいたい言っていることが理解できた。」と言う感想が多かった。同じ映画を一年間見続けたために、主な登場人物の英語に学生が慣れてきたためであろう。生の英語は教授者が予測する以上に学生にとっては慣れにくいものであったようだ。長期にわたる視聴はむしろ必要であったとすら思われる。深い内容のある映画であれば、学生は退屈することなく、繰り返し英語を聴こうとする。授業では同じ場面を最低3回は見たにも関わらず、アンケートには見飽きたという意見はなく、「もっとじっくり見たかった」「場面毎にポーズをおかず一日の授業分を見せてほしかった」と言う意見がむしろ多かった。結局、あるひとつの作品を一年間継続使用できるか否かは、作品自体の「おもしろさ」と「その中で話されている英語の難易度」によるのではないだろうか。教材の適切な使い方を考案することが重要であることは言うまでもないが、「教材として使える、良い映画」の発掘もまたそれと同じくらい重要な課題であると思われる。年間の継続使用が有意義であることはこの一年の実験授業から明かになったが、それが成功するか否かは大きくこの「良い映画」発掘の努力にかかるとであろう。

VI

ところで、映像の（言語的）助力の一つとして、英語の字幕による助力が、最近可能になった。クローズド・キャプション（Closed Caption）というも

のである。これも、教育用ビデオとは違った形で、語学学習のためにビデオを利用する場合の長所を限りなく延ばし、短所を補ってくれるのではないかとと思われる。教育用と非教育用という二区分の間に位置づけられるように期待される。次にキャプションを使った授業について述べてみたい。

キャプション（Closed Caption）とは、米国版ビデオソフト（ビデオテープ、ビデオディスク）への英語字幕挿入方式のことで、本来は米国の非営利団体 National Captioning Institute が、聴覚障害者のために開発したものである。現在米国で市販されているキャプション付き映画ビデオソフト数は、1000タイトルを越える。それぞれ特別マークが付いており、一般のビデオ・ショップの輸入盤コーナーでも手に入るが、専用アダプターを使用しないと、画面に英字幕は現れない。本研究で使用したのは、F U T E K ビデオキャプション・アダプター F A - 700 と F A - 710 である。F A - 700 は、ビデオ・デッキとモニターテレビの間に接続して、英語字幕再生をするものである。これを使用した場合、英語字幕を文字化（テキスト化）するのが不便であった。そこで F A - 710 が開発された。F A - 710 は、F A - 700 の機能に加え、N E C 9800 シリーズのパソコンと接続することにより、字幕のプリントアウトができ、それをフロッピーディスクに記録させ、必要な時に取り出せることができる機能を備えている。更にパソコンによって編集ができ、字幕の基本提示がすべて大文字であるのに対して普通の文字表示に変えることができ、文字の削去、付加も可能である。字幕をテキストとして学生に提示することが可能になったのである。ただ両機種共通の欠点として、画面を停止させると、文字が消えることがある。そこで、本研究では、キャプションで字幕を再生したものをビデオにダビングして、教室ではダビングしたビデオ・テープを使用した。これによれば、停止画面で字幕が消えることはない。

キャプション付き映画ビデオを使った授業の進め方について、菱田は次のように述べている。

基本的な授業方式としては、ビデオを再生しながら重要な箇所を静止させ、映画の内容、背景知識、文法、語法、語彙等についての解説を加えるという方法をとる。生徒は、ヘッドホンを通じて英語と解説を聞く。さらに、L L の機能をフルに

活用した授業を行う。すなわち、先生から生徒に質問したり、生徒同志で話し合ったり、さらに生徒から先生への質問を受けたりする。⁵⁾

菱田の言うのは、映画の画面をテキストとして使用しようとするものである。静止させた画面の解説は、文字テキストが画面に移動した、まさに画像テキストと言えるものである。これに加えて彼は、「予め、重要な箇所を静止画としてピックアップしておき、音声で解説を加えたテープを作成しておくで大変便利である」、「予習教材として、重要な箇所をタイプしたものを学生に配布しておけば、より効果的な授業が期待できる」、「音声的に重要な箇所においては、音声に関する説明をした上で、生徒に反復練習をさせる。また、生徒のカセットテープにダビングさせて自習用教材とする」、「予め、重要語彙を表にして生徒に配布しておき、授業の前に解説しておく」と授業がスムーズに進む」と述べている。菱田のこの発表の頃にはまだFA-710は、開発されていなかった。FA-710によって、彼の言う工夫が非常に有効にやれるようになった。

菱田の言う英語字幕静止画面は、映像文字テキストである。動く映画の中の任意の静止画面を映像文字画面としてとり出したものなので、普通の平板な文字テキストよりもおもしろいことは、確かである。しかし注意しなければならないのは、静止画面では字幕文字と画面のセリフが一致していない場合があるということと音声が消えるということである。

例えば、文学作品を映画化したものに於いて明らかに出てくることであるが、映画は、原作よりも言語表現に限られ、更にキャプション付き映画になると、英語字幕は、映画の実際のセリフよりも表現に限られるということである。英語字幕は、実際に話されている文を画面のスペースと画面の送り速度に合わせて修正編集したものである。従って、場面展開の速い箇所では、語句の言い換え、短縮、割愛が多く行われている。これが日本語字幕となると、翻訳という要素、日本語表現という要素が加わり、元の映画のセリフとの繋がりは複雑なものとなる。

キャプションの魅力の一つは、音声と文字が同時であるということである。聞き取った英語を、瞬時に映像と合わせて、画面の上で確認できることである。しかし聞こえる音声と文字が異なると、難易度が高くなり、ついていけない学生も出てきそうであ

る。そして静止画面で音声がなくなるのであれば、音声と文字の接近というキャプションの利点が生かされない。しかしながらこのような点は、一見欠点に見えるが、長所に変えることも可能である。静止画面で音声が聞こえなくても、文字理解で理解度は高まるのである。キャプションの文字は、読み易く、理解し易くなっている。これは、もう一つのキャプションの魅力である。

本研究では、映画のシナリオと英語字幕の相違という面を、積極的にとらえ、それを教育的に利用することを考えている。原作と映画の相違、日本語字幕の問題は、後に考えることにして、本稿では、シナリオと英語字幕の相違ということが、教育的に利用できることを述べておきたい。この相違が、*Switch On*の時にのべた「対話」、即ち「自主性」を促進させる助けとなるように思われるのである。

今回実験用に使用した映画ビデオは、『卒業』である。服部は、「数多くある映画の中から、『卒業』を教材に選んだが、それは、ストーリーの展開が興味を強く引き起こすものであり、使われている英語が、特別な階層のものでなく、スラングもほとんどなかったからである」⁶⁾と言う。それに加えて、約二十年前の作品であるけれど、当時から評判が高く、作品として優れており、何よりも青春を、大学卒業生の新たな出立の苦しみを描いているからである。そしてNCIよりシナリオがテキストとして出版されたからである。シナリオも多種あって、撮影前のオリジナルシナリオは、出来上がった映画のシナリオと違っている場合がある。NCIのテキストは、出来上がった映画のシナリオであった。

シナリオと英語字幕の相違という面の研究授業では、最初に日本語字幕付き映画を見せ、シナリオの一部に空所を作ったものの穴埋めをさせた。問われている箇所に関しては、三度繰り返した。その後英語字幕を見せ、穴埋めの答えを検討させた。その場合、書き取れる程の時間、約5秒止めた。次に授業の例を挙げる。シナリオに符合する字幕文字を{ }内に添え、相違する部分に下線を引いて記す。BはBenjamin、RはMrs. Robinsonである。

B Elaine?

{Elaine?}

R Hello, Benjamin.

{Hello, Benjamin.}

- B (1=Where is she?)
{Where is she?}
- R Hello, get me the police, please.
{Get me the police.}
- B (2 =Where is Elaine?)
- R I'll be with you in a moment, Ben.
{deleted}
- Do you have a (3=patrol car) in the vicinity of 1200 Glenview Road? Good. We have a burglar here. Just a (4=second) I'll ask him. Are you armed? No, I don't (5=believe) he is. Thank you.
{Is there a patrol car near Glenview Road? We have a burglar. I'll ask him. Are you armed? I don't believe he is.}
- B (6 =What have you done to her?)
{What have you done to her.}
- R I think we have everything quite under control now. Would you like a quick (7=drink) before you go?
{We have everything under control. Would you like a drink before going?}
- B You can't (8=stop) me from seeing her, Mrs. Robinson! I'll find her.
{I'll find her.}
- R I'm sorry we won't be able to (9=invite) you to the wedding, Benjamin, but the arrangements have been so rushed!
{Sorry we can't invite you to the wedding, but the arrangements were rushed.}
- B What the hell have you done?!
{What have you done with her?}
- R Ahh! I don't think you will have time for that drink, after all.
{I don't think you'll have time for that drink after all.}
- B (10=I'll find her.)
{I'll find her.}
- R I don't think so.
{I don't think so.}

下線部分を比較してもらえると、字幕の方が理解し易くなっているのが分かると思う。瞬時の読み取りを目指した結果である。多いのが割愛である。文

章が削除されているのが、二箇所ある。言い換えや短縮がある。これらの相違を書き出させるのも一つの有効な授業法である。もう一度整理してみる。

- (1) Hello, please →削除
- (2) I'll be with you in a moment, Ben →削除
- (3) Do you have → Is there
in the vicinity of → near
2000 Good here →削除
Just a second →削除
No. Thank you →削除
- (4) I think quite now quick →削除
you go → going
- (5) you can't stop me from seeing her, Mrs Robinson! →削除
- (6) I'm →削除
won't be able to → can't
Benjamin →削除
have been so → were
- (7) the hell →削除
done → done with her
- (8) Ahh →削除

このような比較表を作らせ、変化の意味を考えさせるのは有効な授業法だと思われる。基本的に変化は内容理解を容易にするためである。削除部分は、削除しても内容に大差のないものが殆どであるが、文章の削除部分は、適当かどうか、議論の余地がある。そういうことを発展的に話し合うのもよいであろう。また書き換え部分については、違った表現に気付かせ、学ばせるのに有効である。内容理解を高める言い換えとして典型的なのは、“in the vicinity of”を“near”に換える部分である。“near”の方が理解し易い。しかし“won't be able to”を“can't”に変える部分や、“have been”を“were”に変える部分は、拘れば、いろいろ意見が出ることであろう。更に字幕には追加部分がある。“have you done”は、“have you done with her”の方が分かりやすい。

概して字幕の方が分かり易く、読み易い。字幕が理解の助けになるのは間違い無く、また同じ意味の他の表現を学ぶ事ができる。キャプションの内容理解を促進させるという機能が発揮されている。

ここで上記の穴埋め問題の試験結果を、見てみたい。総数36名 満点 10 日本語字幕 平均 5.5

英語字幕 平均 9.2 この結果によれば、日本語字幕では約半分出来、英語字幕の場合、殆ど理解され、理解度を高めるというキャプションの長所が結果として出ている。学生は字幕に集中している。最後の“I’ll find her”の部分では、日本語字幕だけの段階では、“I’ll find”10名、“I’ll find out”9名、“I’ll find her”4名であった。それが、英語字幕段階では、“I’ll find her”が34名で、正解率94.2%である。“find”の後に何かありそうだが明確でなかった状態で、英語字幕に“her”を発見した時、学生の間大きな声が上がった。学生がいかに解答に熱心になっているか示しているようで興味深かった。

そして日本語字幕と英語字幕の比較で興味深いのは、英語字幕にない部分である。試験中に「ない。ない。」という叫び声が聞こえる。「ない」ことが分かれば、それだけでもかなり能力があると言える。“You can’t (stop) me from seeing”の部分は、日本語字幕では77.8%の正解率であった。“Just a (second)”の“second”については、日本語字幕ですでに47%の正解率があった。英語字幕を見たあとの変化は“minute”という答えが36人中5人出て来たことである。耳よりも内容理解が先行した例と言えよう。誤答であるが、学生の「能動的行為」の現れと考えられる。このように、英語字幕にない言葉が、学生の関心を引き付け、学生に考えさせ、耳を澄ませることも可能なのである。この時、学生は能動的である。音声と文字の不一致は、学生にショックを与える。学生を緊張させる。能動的な対応を求める。極端に言えば、音声と文字が一致していれば、学生にショックはなく、不一致のものと比較すれば、受動的なのである。

キャプションは、自ら提示しないことによっても、学生にインパクトを与える事ができるのである。

このように、ある面から見れば欠点と見えるものも、使い方によって長所にもなるのである。教育用ビデオと、非教育用ビデオという区別があるが、そのどちらがよいと断定することよりも、それぞれを生かす工夫が何よりも大事だと思われる。

尚、本研究は本学の昭和63年度研究助成を受けたものである。

以下のものは4月と9月の観客的聴解力テストで使用した問題の原稿である。

1. Do you have change for a five?
 - (A) A dollar and a half.
 - (B) How would you like it?
 - (C) No, not until six.
2. What’s the quickest way to get to town from the airport?
 - (A) No, it isn’t.
 - (B) The road is not so crowded late in the morning.
 - (C) You might take a taxi, but it’s expensive.
3. When may we expect payment, sir?
 - (A) Yes, you may.
 - (B) I’ll get it right off to you.
 - (C) As soon as you can.
4. Should I make an appointment for you with the dentist?
 - (A) I already took care of it.
 - (B) Yes, you’d better have your teeth checked.
 - (C) He can’t see you before next Monday.
5. What are you doing for lunch?
 - (A) Yes, I’m going to eat lunch now.
 - (B) Don’t mind if I do.
 - (C) I don’t have any particular plans.
6. How about some ice cream on that pie?
 - (A) Sounds good.
 - (B) It’s delicious.
 - (C) It must be strawberry.
7. Can’t you see I was standing in line?
 - (A) What’s it to you?
 - (B) The line forms at the end.
 - (C) Oh, I’m sorry.
8. Can you call me a cab?
 - (A) It’ll take about 20 minutes to get here.
 - (B) I wouldn’t say that.
 - (C) Right out front.
9. Just sign on the dotted line.
 - (A) Who shall I make it out to?
 - (B) I can’t believe it’s really going to be mine.
 - (C) What is your name?
10. Let me treat you this time.
 - (A) Thank you.

(B) I paid for you the last time.

(C) You treat me too well.

注

- 1) 河野 護：ヒアリングにおける映像の役割，英語教育，28(12)，13-15，1980.
Markson-Brown, John: Video Language as Input, The Language Teacher, 40(2), 131-135, 1985.
月山みね子：聴解の指導：コースエバリエーションの分析，Language Laboratory, 25, 72-86, 1988.
- 2) Loneragan, J: Video in Language Teaching, I, Cambridge Univ. Pr., Cambridge, 1984.
- 3) 同書， 5
- 4) Someya, Masakazu: On the Use of English Movies as Effective Teaching Material, Language Laboratory, 26, 78-86, 1989.
- 5) 菱田一三：映画の Closed Caption を応用した英語視聴覚教育，The 28th National Conference Handbook, 48, LLA, 1988.
- 6) 服部良輔：「映画」を使った授業，NCI REPORT, 3 (10), 1989.

(受理 平成2年2月20日)